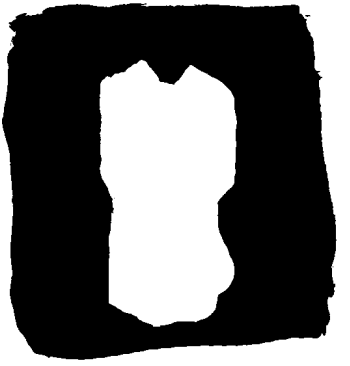
# わが青春のとき

倉本聰

理論社

# わが青春のとき



倉本 聰

理論社

## 著者紹介

昭和10年東京に生まれる。東京大学文学部美学科卒業。34年ニッポン放送入社。37年退社後，シナリオ作家として主にテレビを書く。代表作としてテレビ「文五捕物絵図」「赤ひげ」「前略おふくろ様」「6羽のかもめ」「うちのホンカン」「幻の町」他。映画「冬の華」「駅」他。著書「さらばテレビジョン」「新テレビ事情」他。
第17回毎日芸術賞，昭和51年度芸術選奨文部大臣賞，昭和57年第55回キネマ旬報・第36回毎日映画コンクール・第5回日本アカデミー賞各脚本賞，第4回山本有三記念「路傍の石」文学賞受賞，他。

0093-90227-8924

© Sô Kuramoto 1982 Printed in Japan

わが青春のとき

一九八二年三月　第二刷
定価／九八〇円

著者／倉本聰（くらもとそう）
制作／小宮山量平
発行／山村光司
発行所／株式会社理論社
東京都新宿区若松町一〇四
電話(03)二〇三－五七九一
郵便番号　一六二
振替　東京九－九五七三六
乱丁・落丁本はお取替えいたします。
印刷・加藤文明社

倉本聰作品

A・J・クローニンの原作による

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# わが青春のとき

装画　長新太
装幀　平野甲賀

# I

**西邦大学**

冬の陽。

午後四時を指した時計台から、鐘の音が構内に流れている。

カメラ、静かに移動して、その中の一つの古くいかめしい建物に固定する。

**同建物**

入口に「医学部病理学科」の表示を見て、ゆっくり中へ入って行くカメラ

一つの声がしのびこんでくる。

声「——いえ、それは無理だと思います。先生のスケジュールは二週間先までいっぱいです」

カメラ、いくつかの廊下を移動して、一室の前に一つの名札を見る。

「木部教授」と書かれたその名札。

カメラ、その室内にゆっくり入る。

手前の部屋で電話に出ている助手の梶原。

梶原「——はい。——はい。——そうしていただければ——はい。——さぁそれはわかりません」

カメラ、止まらずゆっくり衝立の奥へ入って行く

新聞記者の声が、梶原の声に入れかわる。

記者の声「——すると、ドイツ行きが実現すれば、帰られると学部長の椅子が待っている」

木部の声「困るねきみ、軽率にそういうことをいってもらっちゃ」

記者の声「しかし、戸倉学部長はもうこの三月で停年ですし」

カメラ、三人の記者に囲まれた木部教授の顔にはじめて固定する。
木部「私の前にもっと適任者がたくさんいますよ」
記者1「しかし、オッペンガー大学の名誉博士号をとられればこれは」
記者2「それより、去年の学園紛争の時の実績ですよ」
記者1「ああ、そりゃあもちろんだ」
記者2「何しろあれだけ各大学が騒いだ中で、ここがまったく平静だったのは、やはり学部長代行としての木部先生の――」
秘書の女が来て、木部の耳にささやく。
秘書「お宅からお電話です」
木部「ああ、ちょっと失礼。(電話をとる)私だ、ああ、いや、遅くなる。そう、いや、江波製薬の社長の招待だ。赤坂だ、え?」
梶原入る
梶原「先生、お迎えのお車が参りました」
木部「(うなずきつつ電話する)ああ――ああ――」
音楽――荘重に入って、B・G。(次のシーンのバックに流れる)

**同・廊下**

記者や助手たちを従えて、玄関へ歩く木部の貫録。

**同・表**

社旗を立てたハイヤーに無造作にのりこむ木部教授。
見送る一同の物々しさ。
音もなくすべり出る木部の車。
音楽――細く美しく転調して、B・G。

**廊下**

いくつかの廊下のモンタージュ。

**一室の表示**

「木部病理学研究室」

**同・内**

実験室。

フラスコや試験管、モルモットでいっぱいの室内に、
黙々と立働く人々の群れ。
カメラ、それらの人々をなめて、試験管を持って移動する女子インターンにフィックスする。
机の間をぬって移動する女子インターン、加島美月、二十三歳。
美月、一つのテーブルに試験管を置き、チラとそのそばで顕微鏡をのぞいている一人の助手を盗み見る。
助手——武川和人、二十七歳。
和人、一心に顕微鏡をのぞいている。
音楽——中断。

**顕微鏡の中の世界**

異様に美しく、まるでサイケデリックな照明のように静かに流れている原色の細菌群。
タイトルがゆっくりその上にかぶる。
音楽——弦楽四重奏によるテーマ曲、イン。

**時計**

五時。

**研究室**

一同、機械的に研究をやめ、白衣を脱いで帰り支度。
木部教授の秘書がその間をぬって、助手たちのみにわずかな給料を払って歩いている。
派手な背広に着換えている梶原。

秘書「梶原さん」

給料袋を渡す。梶原、無感動に受取るとピッと封を切り、二枚しかない一万円札を出し、袋を丸めて屑かごに捨てる。そのまま歩いて、

梶原「阿部」

オーバーを着ていた阿部がふり向く。
その半顔にある無惨な火傷の痕。
梶原、一万円つき出して、

梶原「返すよ」

阿部（うなずく）

梶原「岩本さん！岩本さん！」

出て行った岩本を追いかけて走り出る。

助手1「梶原、バイトの金入ったらしいな」
助手2（冷たい目で梶原を見る）
　阿部、そっとオーバーを着ている和人に近づく。
阿部「武川」
和人（ふり向く）
阿部「暇か」
和人「いや、ちょっと――。なぜ」
　阿部、一万円札を見せる。
阿部「借金が返った。ちょっとだけ（飲む真似）どう」
和人「だめなンだ。申し訳ないけど」
阿部（口をとがらしうなずく）
和人「帰って奥さんを喜ばしてやれよ」
阿部「いないンだ今夜」
　和人、チラと見、カバンにノートをつめる。
　その横を出て行く美月。
美月「お先に」
二人「ああ」
助手1・2「さいなら」
二人「さよなら」
　カバンにノートをつめる和人。
阿部「（周囲を気にし、急に小声で）明日また行くンだろ
　――五日市」
　和人の手が止まる。
　阿部を見る和人。
　阿部――チラと周囲を見る。
　以下、低い会話。
阿部「梶原のやつが探りを入れてきた」
和人「――――」
阿部「気をつけたほうがいい」
　間。
和人「おれの時間内のおれの研究だ――悪いか」
　間。
阿部「そういうところかね、この研究室は」
　和人の顔。
　阿部の顔。
阿部「お前のためにいってるンだ」
　間。
和人「わかってるよ、ありがとう。注意してやるよ」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

和人、ちょっと阿部の肩をたたき部屋を出る。

**校門**

出てくる和人。

**舗道**

歩いて行く和人。

**通り**

歩道を歩く和人。
かなり広い車道のむこうの本屋の店頭で、立読みのふりをしつつ和人を見る美月。
サッと本を閉じ、対岸の舗道を歩きだす。
車道をはさんで行く美月と和人。

**地下鉄入口**

無表情に消える和人。
急ぎ足に追って入る美月。

**走る地下鉄**

**六本木**

地下道から並んで現れる和人と美月。
まっすぐ交差点へ向かって歩く。

**俳優座前**

やってくる二人。
芝居の看板。
客。
ハンドバッグから二枚の切符をとり出す美月。
和人に渡す。
和人――受取らない。

美月「?」

和人「どうしても観たい?」
短い間。

美月「(首をふる) どっちでも」
短い間。

和人「話があるンだ」

美月（うなずく）
和人「めし、おごるよ」

**イタリアン・レストラン**

カンツォーネが流れる。
ろうそくの火に、二枚の芝居の切符が焼かれる。
灰皿にそれも置く美月の手。
炎。
美月の声「阿部さんせっかくくれたのに」
和人の声「――」
美月の声「奥さんと行くつもりで買ったンですって、そしたら奥さん都合悪くて」
和人の声「――」
美月と和人。
美月「どうだった？ってきかれたら何ていったらいいのかしら、こういう時」
和人「――」
美月「やっぱり見たふりして、よかったわっていったほうがいい？」
チラと和人を見る美月。
無言でマッチをいじっている和人。
美月「ねえ」
和人（見る）
美月「――」
間。
美月「お話ってなに？」

＊

食事をしている二人。
静かな音楽。
美月「（食べつつ）お話ってなに？」
間。
和人「ぼくの研究のこと気づいてた？」
美月（見る）
和人「教授からやらされてるテーマじゃなくて」
短い間。
美月「（うなずく）阿部さんからちょっと聞いた」
和人「（うなずく）どこまで？」
美月「内容は何も。――ただ、一人でこっそりやってる

らしいって」
和人「――」
美月「教授に気づかれなきゃいいけれどって――阿部さんとっても心配してた」
和人「――」
美月「木部教授、そういうこと、悪評高いでしょ――いろいろ」
和人――食べている。
美月「武川さんの研究のテーマってなに？」
和人「――」
美月「いうのまずい？」
和人「首木病だよ」
美月「首木――一時新聞で騒がれてた？」
和人（うなずく）
美月「たしかどっか東北の農村で」
和人「（うなずく）岩手県の首木村で発生した風土病さ。白血球が急激に増えてね、原因不明のまま死亡する」
美月「いわゆるポックリ病の一種じゃないかっていわれたりしたでしょ」
和人「（うなずく）けど違うんだ」
美月「違うの？」
和人「たぶんね」
美月「――」
和人「今、五日市の奥の高見沢って村に、似たような病気が発生してる」
美月――フォークを止め、和人を凝視する。
和人「日曜日ごとにそこに行ってるよ」
間。
美月「あがってるの？　成果」
和人「少しはね。ただ――」
美月「なに？」
和人「下宿の、自分の顕微鏡しかないからね」
美月「――」
和人「設備がいるンだよ、もっとちゃんとした設備が」
間。
美月「それで？」
和人「――」
美月「それでなに？」

短い間。
和人「大学の研究室にはもちろんそんなもの持ち込めないしね」
美月「そりゃそうよ！　木部教授絶対そんな事許さないし、第一許すとしたら、全部自分の手柄にしちゃう」
間。
美月「それで？」
和人「うン――実ぁそれで、きみのお父さんのことを思い出してね」
美月「父を?!」
和人（うなずく）
美月「――」
和人「お父さん、医師協会の理事をやってるっていってただろう」
美月（うなずく）
和人「大変勝手なお願いなンだけど、一度会って、相談にのってくれないかと思ってさ」
美月「相談って――どんな？」
和人「だから例えば――バックアップしてくれる、だれか適当な人を紹介してくれるとか――」
美月の顔。
和人「ダメかな」
美月「いいわよもちろん――きいてみてあげる」
和人「ありがと。悪いな――それ、残すの？」
美月「？（うなずく）」
和人「ちょうだい」
美月「どうぞ」
和人――美月の残した料理を食べる。
奇妙な微苦笑で和人を見る美月。
静かに続いている店内の音楽。
美月「話ってそのこと？」
和人「（顔上げる）え？――うン」
美月「――」
ちょっと淋しい美月。
食べ終わる和人。
和人「ああうまかった！――（美月の視線に気づいて）なに？」
美月（首をふる）

和人「――」
美月「ねえ、どっかで少しお酒飲まない？」
短い間。
和人「金ないよ」
美月「大丈夫。持ってる」
短い間。
和人「どっか知ってる？」
美月「こないだ梶原さんにひっぱって行かれたの。何とかっていうアングラバー。――そういうとこ知ってる？」
和人――首ふる。

バー「HAIR」
ゴーゴー。
隅のボックスにいる和人と美月。
ものめずらし気に若者たちを見ている和人。
美月「ねえ」
和人「え？」
美月「そのことを頼むために、今日出てきたの？」
和人――美月を見る。
美月「もともとお芝居見る気なンかなかったでしょ」
短い間。
和人「そんなことないよ」
美月「――」
和人「どうして？」
美月――首ふる。
和人の顔。
踊る若者たち。
入口――、この時、梶原が、一人の美しい女を連れて現れる。
グラスを上げかけた美月――、ハッとそれに気づく。
和人の腕をつかむ。
和人、見る。
梶原――、二人に気づかず、奥の席へ行く。
二人――。
美月「だれかしら――」
和人「――(首をふる)」
美月「きれいな人」

奥のボックスに坐りこむ梶原と女。
和人と美月――。
和人「出ようか」
美月うなずきボーイを呼ぶ。

**夜の街**

歩く二人。
美月「明日の日曜も五日市に行くの?」
和人「――ああ」
歩く二人。
美月「一緒に行きたいな」
和人「――」
美月「手伝うこと、ない?」
無言で歩く和人。
その横顔の厳しい冷たさ。
とりつくしまなく、ちょっと淋しい美月。
音楽――イン。B・G。

**青梅線**

走る。

**バス**

田舎の道を行く。

**高見沢村への道**

一人、急ぎ足に行く和人。

**同・村**

**その公民館**

**同・内**

患者の手から血液が採取される。
寒々とした館内。
青年団員が手伝って――、順番に並んだ患者の手から、血液を採っていく和人。
物に憑かれたような和人の顔。
しわの刻まれた農民たちの顔。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com